「死と復活の予告」　2023年05月12日

そして、言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」それから、イエスは皆に言われた。「私に付いて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を負って、私に従いなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、私のために命を失う者はそれを救うのである。」（ルカ９：22～24）

主イエスから「あなたがたは私を何者だと言うのか」と問われた時、ペトロは真っ先に、「神のメシアです」と答えた。ペトロの「メシア告白」を聞いて、主イエスは、このことを誰にも話さないように命じられた。ユダヤの民衆は、ローマ帝国に屈辱的な支配を受けていたので、政治的解放者としての「王」のメシアを求めていた。主イエスが現わすメシアは自らが苦難と死を負って人間の罪を赦し、復活したキリストが共にいるインマヌエルの救いを与えるメシアであった。このメシアは誰にも受け止めてもらえず、誤解されるから、口止めされたのではないか。しかし今から、主イエスはエルサレムに上り、苦難を受け、死を迎える、そして、復活することを弟子たちに語っておく必要があると思われた。そこで、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」と告げた。「人の子」は主イエスのことで、自分は最高法院（サンヒドリン）の議員たちから排斥され、殺され、そして、三日目に復活すると、弟子たちに初めて、死と復活を予告された。彼らは全く理解できなかった。律法学者たちから嫌われ、命を狙われていたが、主イエスは彼らに臆することなく、堂々と対応しておられたので、彼らに殺されることなど、想像もできなかった。また、死からの復活はあり得ないので、考えられないことであった。弟子たちは何を言っておられるのかと、戸惑っただろう。戸惑う弟子たちに、死と復活の予告を聞かせた後、主イエスは付いて来たい者に、信従の三つの勧告を語られた。一つは「自分を捨て」である。「自分」とは、自己の利益と栄誉を求めるこの世的な欲望である。それを捨て去れと求められた。二つ目は「日々、自分の十字架を負って」である。十字架は苦難である。苦難は意図せずに背負わされるものと、人を愛するゆえにあえて背負うものがある。その苦難の十字架を、日々負えと勧められた。人は誰でも、苦しみは避けたいが、それを負い続ける。三つ目は「私に従いなさい」である。主イエスへの信従は一時の感情ではなく、生涯にわたって従い続ける。三つの勧告は、死んで復活する主イエスに重なり合う者になるという祝福の約束である。自分の命を救おうと、欲望に生きる者は命を失い、主イエスのために命を失う者は命を救う。人は全世界を手に入れても、自分自身を失い、損なうなら、何の得があるか。主イエスと主イエスの言葉を恥じ、拒絶する者は、終末の日、神とキリストと天使たちが栄光に輝いて来る時、恥じられ、拒否されるであろう。主イエスに倣い、自分を捨て、苦難の十字架を負う者に復活の輝かしい命が与えられる。パウロはフィリピ書３章10節で「私は、キリストの復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と言い、その信仰を生きる時、「私はキリストと共に十字架につけられました。生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです（ガラテヤ書２：19b～20）」と語っている。十字架に結びつく時、復活の命に与る。これがキリスト教信仰の核心である。